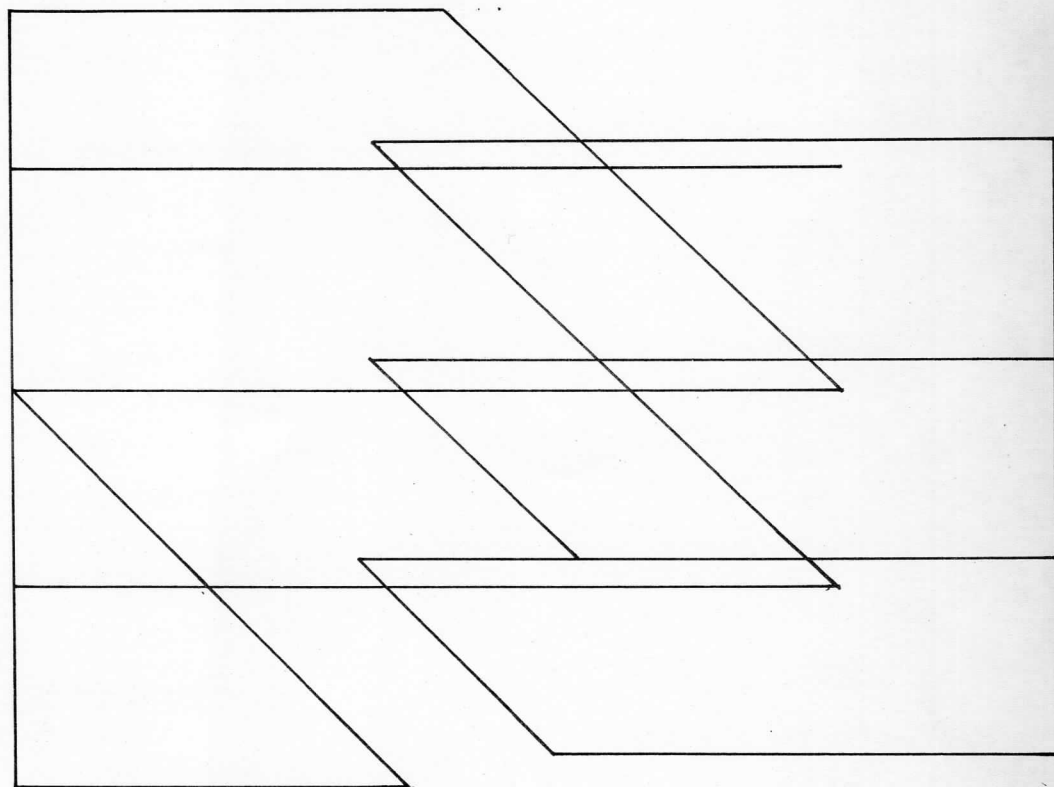


リベール

第2号



日本アナキズム研究センター

誤字

正誤表

- P3 上22行目 意訟→意識
 P8 下11 産産的→産産的
 下25 契期→契機
 P9 上3 庄例→庄例
 P11 下15 である(挿入)
 P16 下20 本本文(とる)
 下6・8 宋世何→宋世何
 下7 李乙→李乙奎
 P18 下25 に括める(挿入)
 P20 上10 ———(")
 下1 解放→解散
 P21 上20 パンス→パンフ
 上25 串の④(とる)
 下3 作年→昨年
 P22 上22 背版社→背版社
 上24 場→登場
 P23 下2 閑→閑談
 P25 上2 甥(挿入)
 下17 さげまき→さげまき
 P27 上2 陀(挿入)
 上15 唐(挿入)
 P29 上16 座談会→座談会
 中14 終子→終る
 中16 新部→新聞
 P31 中31 信農→信濃
 P33 中1 先 →先鋒
 P34 上1~3 (全文とる)
 P37 英文タイトル

The Origins of the Movement for
 Workers Councils in Germany
 1918→1935 "Raden" by Witha

forward by Joe Thomas
 Coptic Press

- P38 上6 発往→発生
 上7 と屈短は(とる)
 P41 上25 樹樹樹樹→の樹樹の樹樹
 P43 上3 社会主義→社会主義
 上15 時宣→時宜
 P44 上5 運動→運動
 P45 下2 再醒→覚醒
 P46 下23 向もの→何もの
 下24 共產産党→共產党
 P47 上2 新しい→新しい
 P49 上22 同盟→純同盟
 P50 下4 綱→綱
 P51 下2 幻戀→幻滅
 下4 宮延庁長→宮廷吏長
 P52 上3 とにかくこの(挿入)
 下2 刺熊苦→手熊君

1974.2

リベロー 2号

日本アナキズム研究センター

目	次
生きるわれらの村へ	彌栄之郷共同体 2
フランスのアナキストたち	江口 幹 10
アナキズム研究センター	17
センター紹介・今年の活動	
センターについて	龍 武一郎
センターとの関わり	中村 隆司
戦後アナキズム運動史年表	戸駒 恒世 26
ドイツ労働者評議会運動の起源	コプティック・プレス 37
1918~1935年	片山 政幸・訳
編集後記	52
宋世何寄贈図書目録	

生きるわれらの村へ

彌栄之郷共同体 — (文責・大原みち代)

編集部から依頼されたテーマは、われわれの共同体運動が二年前、岡山県の備北開拓の地から今の島根県那賀郡彌栄村に、その最初の根付きの地を移した際の事情の経過と、それに対する総括というものである。正直なところ今の自分たちには、あまり筆のすすまない仕事であり、また、そのことにそれほど生産的な意味があるようにも思えないのであるが……

一、経過と総括について

まず最初に、基本的な事実を記しておく、

1 備北共同体運動の「分裂」として考える考え方は、事実と反しており、事実上、「備北開拓」の地が共同体運動に適していなかったため、運動全体として開拓の地を離れたということである。

2 何故そこが共同体運動に適していなかったかというと、土地の所有者であるI君が所有権を主張し、その土地を共同体運動に供することを拒否したからであり、また、われわれも共同体の土地が特定個人の所有地でないことは前提であるべきだと考えていたからである。

3 以上により、備北開拓には、「共同体運動」はもはや存在していない。備北開拓に残ったものは、その土地を所有しているI君という百姓志望の一人の青年である。

などがあげられる。また、I君との間に具体的問題となった意見の相違点は、次のようなことである。

1 キャンプ（ワーク・キャンプ）は学生が遊びで来るようなもので、自分の生活が乱されるし、自分はその遊びの尻ぬぐいばかりせねばならなくなっている」という語からもわかるようなキャンプに對する評価。

2 労働契約——仕事の分担にとどまらず、その生産物や生産手段の所有にも結びついていく内容であった。

3 共同財布に反対であった。

以上のような相違点から、われわれは次のような総括をして、備北開拓の地を離れた。

× × ×

一人の英雄を待ち望むのではなく
今こそわれわれ一人一人が

重い感性と鋭い理論をもって
眞の共同体運動を創りだすのだ

「経過」で述べられたような結果、昭和四十六年三月からの備北を中心とする共同体運動は、昭和四十七年五月六日、連休キャンプをあと二日ほど残したまま「終り」を告げなければならなくなつた。それを今われわれは仮に「第一次備北共同体運動」と呼び、今後続けられるであろう「第二次」「第三次共同体運動」が確実に、さらに発展したものになるよう。「第一次共同体運動」をこの時点で精一杯総括しておかねばならない。

今までの共同運動のはらんできた問題点について全般的に次のように指摘することができる。

一 そもそも共同体とは何かという原理的な把み方が十分なされなかった。共同体が過去の社会、経済的な土台のどこに根ざし、未来においてどのような位置をもつてあるのかという巨視的な展望が十分になかった。この点では、知識人の共同体論もほとんど処療法処方せんではない。私たちはまず自分の力で実験し、討論を重ね共同体運動の理論化に取り組むべきであろう……共同体の社会経済的基盤の認識

二 共同体運動の参加者みんなの生活および態度に一種の中間性がつきまとい、名目だけは、集団意欲を強調しながら、その地点をいかに甘く通りすぎている傾きが強い……共同体における八集団Vの重さ

三 以上のことからひきだされるように、今までの共同体運動が

理論的には低く、感覚的には軽かったという事実は、現在の共同体が対立の持続に十分に耐えられないという結果をもたらしている。そのため、対立点をぶつつけ合うのが交流だという大胆な開放された気分をもたない……高く重い意識をもって明確な関係

を。
四 だから、意識的に交流（関係）をつくりだす立場、つまり工作者の精神が共同体創出当時を除けば急速に衰えてしまいやすい。とりわけ、特定個人だけでなく、共同体運動の参加者全員が工作者になっていくという努力は今までのところゼロにひとしい……工作者意識の持続

夕ネを明かせば、実はこれは一九五八年に九州の地で谷川雁らを中心になって作り始めた雑誌「サークル村」の創刊宣言の一部である。彼らの使う八サークルVという語をわれわれの共同体と置きかえるだけでこれが実に新鮮にわれわれの運動の総括としても読むことができる。

われわれが出す総括も実は「サークル村宣言」の四つの総括にすでに包括されてしまっているが、重複しつつも、さらに具体的事実を追って何が問題であったかを考えてみよう。

平等の前提と現実の力の差違

共同体を語る時、その前提に八平等Vであることが確認されていなければならない。しかし、人間の能力、体力、知識、さらには共同体に入る前の財力などが最初から均一であるはずがない。いわゆる通常八社会Vでは、これらの力の八差違Vが階級・身分

を作り出した悪の根源であるのだが、はたして共同体ではこれらがいかに処理されるかというのが大きな課題としてある。「能力に応じて働き、必要に応じてとる」というのは共同体の理想であり、共同体を創出しようとしている現在のわれわれの原則でもあるのだが、いかにしてそれが実現できるのか、第一次備北共同体運動の困難さは、このもっとも基本的でしかもっとも重要な設問の前で足ふみした。すなわち、備北の出発が土地に関しては当初個人の所有地であり（これは買い戻すことは不可能だった）、農業技術にしても個人に頼りすぎたきらいがある。またキャンプ・リーダーの問題が提示した、キャンプにおける問題意識の共有のための努力も不十分だった。「知識の独占は権力を生む」けだし明言。しかし、今はその前でそれを食いちぎれなかった自分たちの問題ばかりが残っているのだ。

手段は目的を内包する

牧歌的にユートピアを語っているかぎりにおいて、多くのものは一致したかのように思っている。たしかにそれは一致している面も多い。しかし、今、われわれが備北を前にして共同体を語る時、ゴール（理想）とともに、否それ以上にプロセス（過程）が重視して語られねばならない。そして当然その両者に食い違いがあつてはならない。「目的は手段を：」はロシア革命を官僚に売りとしたレーニンの発想であるが、われわれはこのようなレーニンの誤ちに堕してはならない。

たとえばわれわれは△流通・直売△というところで一致してい

たかようであつた。しかしそれは行為ややり方においてのみの類似であつて、その意味あい、結びつきの質においては、大きく異つていたのではないか。共同体運動（百人委運動）からみれば、生産も販売もそれぞれ運動の一機能であり、「全体を構成する部分的関り」でしかない。だから生産があつてそれを手伝うものとしての販売があるのではない。むしろ逆に消費者と接し、消費者を組織することのために販売が生産を規定（又要求）する場合もあり得るのである。このような考えからすれば、プロイラー（鶏肉）、牛、ブタというのは、もうかるかも知れないが、消費者運動を共同体運動と考へて行ふとき、不適當であるといわねばならない。

生産に従事する者と、販売に従事する者の間に主従を作り出すことは、「客としての外来者なら受け入れるが：」とともに共同体の志向と相反する考へであるといわねばならない。

経済的自立はかくれみではない

共同体の経済自立がすべてに先だつ前提条件とする考へ方があり、それによると、「△いっばしの百姓△として△商品△として通用するものを生産し、それを売って△自立△でなければならぬ」ということになる。

△いっばしの百姓△が△農業技術の習得△なり、△経済的自立△をさすならそれはそれで一般的に正しい。当然△アマチュアリズム△も「自立すること」を決して輕んじるわけではない。しかし、現代社会の問題はまともな△いっばしの百姓△を許さないと

ころにあるのではないだろうか。その意味で、現代社会のなかに於るへいばしの百姓∨は、資本主義社会のなかに於るへ共同休∨と同じく、言語矛盾存在であり、矛盾存在でしかない。

イすなわち、一般的に言って百姓は普通の労働者以上の過重労働を強儀なくされている。日曜・祭日が特別休みであるわけではなく十時間から時には十二時間労働さえ強いられている。これはあくまでへ強いられるのであって、自らすすんでやっているわけではない。「へいばしの百姓は……」とか「自立するためには……」ということで「強いられる労働」に目を向けずに、労働の質を考えず、「生産を上げる」ことだけを第一に考えていると、現在の抑圧された農民と同じ状態に陥し込められてしまう。つまり労働者との生活差異、農業切り捨て政策等のひずみを社会へ矛盾∨として捉え、「強いられること」——を享受するのではなく、それを闘争へのバネにもっていかなければならない。こういう原則は、共同体内労働においても同じである。

ロ「共同体の自立」を語る時、社会としての共同体の「社会的（最低）必要量」（共同体のメンバーが生活していくための最低必要な生産量）が問題になってくる。その線をどこに引くかによって、「自立」が遠くなったりもする。物質的にのみそれが語られるとき、その根拠はほとんど個人の主観にしかなく、その主観も今の資本主義社会で相対的に築かれたものである。現代社会で、共同体が矛盾存在としてしか存在し得ないなら、「社会的必要量」にもへ絶対的ライン∨は決めがたいし、やたらそれを振り回すことによって生活に振り回される愚を避けたい。

「ようするに、食えて、運動できりゃいいんじゃないですか」と

さりげなく言った一人の同志の言葉を重いものとしてうけとめた。

ハイロでは、共同体の自立を物質的経済的側面からのみ重視するあまり、共同体の「労働の質」や「変革力」を儀性にしてはならないことを述べてきたが、全く同じように、備北では「経済的自立」の陰に「ほんもの農業」の志向を失ないかけていた。すなわち、われわれが直接農業をし、それを直接消費者の台所へ持つていくことによって、「農業公害」が叫ばれている現在の農産物生産体制にささやかなプロテストを行うはずだった。

それが、経済的自立のために、「高く売れるもの」「商品価値のあるもの」にすり変えられようとしていた。われわれの共同体ではあくまでもそこでの生産物が商品化することを拒否することから出発せねばならないのだ。

農業があつての運動、運動があつての農業

「別に農業でなくてもよかったんだ、共同体運動ができるなら大工でも機械工でも何でもよかったんだ」「ただ運動の場として、農業を選んだ」という発言が討論の中で出された。それに対して、「現代の農業体系のなかでそうでない方法の百姓をしてやっていたことを実証すること、それが運動だ」ということも話された。

a、「農業があつての運動」b、「運動があつての農業」との二つに大別できるが、今の所、そのどちらも十分に理論化されていない。aはしばしば「共同体」という視点が欠けてしまい、またその具体的戦術が不明確のまま、そのエネルギーが体制に絡み

とられてしまふし、bにしても戦術として農業を選んだとしても、そこを射つことによって真に体制（現代社会）を射とめられるかどうかの理論化および展望が薄弱だった。われわれの志向が共同体運動であることには変りはないが、まず具体的に設置したプロジェクトが農業共同体である限り、現代の農業問題、農業政策に対する学習を徹底し、そこで自分たちが十分に闘い得るかということ、を今一度深く考え直さねばならない。そこで初めて、現代社会に對置し得るトータルな共同体の像が射程にはいつてくるのである。

百人委思想の実質ためす運動を

われわれはしばしばわれわれの共同体運動を関係革命という言葉で表わしてきた。現在、備北の地、一人の仲間と離れてやることになった。それは関係革命の破産なのか、否、断じて否である。同じ考えの下に一緒になってやるのだけが関係革命ではない。備北の地の離れた仲間との関係は今後も続くだろう。むしろこれらが本当の関係革命期であると言わねばならない。今までの、ともすれば特定個人の事実のみが問題化され、他の個人の事実そのもののぶつけ合いが不充分であったことを謙虚に反省しなければならぬ。そして、それぞれがそれぞれのやり方で創造した「事実」をつき合わせることによって、その「事実を媒介」にして、新たな関係、第三の道、別の「事実」の創出が可能になってくる。それこそ関係革命だし、第二次共同体運動期にはそこまで進まねば進歩したと言えないだろう。また、特定の個人の問題を個人的

な問題としてきりすててしまふのでなく、「個と集団」の問題に普遍化する作業もおこたってはならない。

今、われわれが置かれている位置は明白である。さまざま思ひ出を残して備北を去ることになった。しかし、第二次共同体運動はその時点からすでに始まっている。中国山地のどこかで、あるいは都会の片隅で次の共同体の産ぶ声が上がろうとしている。備北を去るということ、われわれの運動——百人委の思想が破れたということにはならない。第二次共同体運動を背負い始めているわれわれには百人委の思想の実質化という大きな課題がある。いよいよ、これからその中身をためしていく運動をはじめなのだ。百人委の思想の実質化こそ、今、この時点で言える第一次備北共同体運動が残した最大かつ唯一の課題である。

以上連休キャンプのミーティングで話し合ったことをもとに、第一次備北共同体運動の総括として、われわれなりにまとめたい。

この総括は、決して「統一見解」としてのそれではありません。今まで、それぞれのやり方で関わってきた人、ひとりひとりが、自分なりのまとめをして、たしかなものにしていけばいいのです。これは、いわばその「たたき」です。第二次：Vへの出発の今、そのぶつけ合いこそ、必要な作業ではないでしょうか。（『備北だより』五号より）

二、弥栄共同体の建設と活動

約一カ月の「間借人共同体」生活を送りながら、中国山脈を走

りまわり、土地を捜しまわった結果、一九七二年七月、島根県那賀郡彌栄村に最初の共同体地をみつ、四人の仲間が住みこみ、彌栄之郷共同体が出発したのである。

一九七二年八月、七三年三月、五月の連休とキャンプを重ね、新しいメンバーも加え、農産物の収穫ができるようになった彌栄之郷共同体では、七三年六月から、広島消費者協会との提携により広島市内の三つの団地で、青空市場・個別訪問方式による直販活動を始めた。共同体で穫れた野菜類が週一回のペースで広島の消費者に定期的に供給されはじめ、売り上げも少しずつながら伸び、共同体も直販でどうか自給できるようになった。

一九七三年七月二〇日〜九日一〇日、二カ月間にわたって夏の労働キャンプが開かれ、このキャンプによって「共同体キャンプ」の形式が確立した。メンバーは共同体のメンバーと一緒に共同の生産活動・直販活動・日常闘争のすべてに関することによって、彌栄之郷共同体を深く理解できたようである。そんなこともあってか、キャンプを終った時、六人の新しいメンバーが増えた。

七月ころから共同体は、部落の農民に対して直販活動への積極的な参加を働きかけてきた。定期的に部落へ話し合いに行ったり、「ガマの穂」という部落向けの新聞を発行したりして共同体直販への出荷を呼びかけ、このような活動を通じて、農村のコミュニケーション化・共同体の試みを模索している。

彌栄之郷共同体が動き始めて一年余、彌栄村に居ること、農業をしていること、直販活動をしていることの根拠を、情況から鋭く問われているわれわれが、自らの根拠を明確化しようとしたのが次の四つの闘いである。

四つの闘争方針

- 一、農村のコミュニケーション化——村落共同体（ムラ）の復権とその闘い
- 二、生きのびるための都市の闘い——反公害闘争・生活自衛闘争
- 三、自前の流通体制の確立——反資本闘争として
- 四、コミュニケーション戦士（共同体志願者）の養成——労働教育・生活教育・共同体教育・自己変革の学校として

その一 ムラ、その復権

われわれ彌栄之郷共同体がこの一年間依拠してきた位相から今のわれわれには、農業問題というより農民或いは農村というものが、われわれのコミュニケーション運動にとってより普遍的なものとして視えてくるようになった。すなわちわれわれが共同体運動を通じて追求しているものは、コミュニケーションとか革命とかの干からびたモダニズムの概念を外部注的に実現しようとするのではなく、かつて村落共同体（ムラ）が持っていた共同性と自治性と平等性と反権力の芽を、現代社会の中に復権させることであると考える。また、農耕文明を基調として発展してきた現代社会では、農村だけでなく都市にあっても、村落共同体（ムラ）の精神が、日本人の精神構造に地下水のごとく脈脈と流れている。日本人の原像としての農民像を、われわれは否定することはできない。これを射たなくて、何を射つか。

現代社会の抑圧性と権力性は、村落共同体（ムラ）を崩壊する

ことから始まったと言っても過言ではない。われわれはあえて断言する。村落共同体（ムラ）は闘いうる。村落共同体（ムラ）こそ闘いえる。

われわれがコミュニケーション運動という長い旅路に出発したときから、へ常駐者たちと名付けられた数人のわれわれで創りだす家族のありようには、さほど大きな興味をもっていなかった。コミュニケーションということばの持つ地理的・空間的、或いは行政的意味あいすらこめた運動を考えると、われわれのへコミュニケーションには、彌栄村八百世帯が、もっとも現実的には横谷部落二四世帯が、何よりも想起される。例えばわれわれがへ共同体直販という名で始めた直販活動にしても、そこであるへ共同体は彌栄之郷共同体をさすのではなく、横谷部落二四世帯の不可視のムラをさすものとして位置付けている。

高度資本主義の道を突っばしる今の日本の社会にあって、農民はひとつの階級としての、被抑圧性を共有する悲劇の舞台にある。その共同運命性は、農民がムラとムラの持つ自治性を復権させることを余儀なくさせている。そしてさらに、ムラがムラであるうとするとき、避けることのできない権力との闘いがあることを予知するのである。

その二 反公害・生活自衛

農村を拠点にして運動を展開しているわれわれにとって都市との関わりは、直販活動を通じて行なう以外に多くの機会はない。そのためある種の限界がつきまとうことは避けられない。われわれが彌栄之郷共同体から都市あるいは都市の消費者を見たとき、自らの立場を生産者として確認せねばならない。例えば、われわ

れは直販活動を通じて生産者として都市の消費者に対し何ができるかという点、今まで具体的に見えてきた点でいえば、①無農薬野菜の供給による反公害闘争②安価な農作物を共同購入するといふことを契機にした消費者協同組合の可能性の追求があげられる。しかしこの種の都市での運動は、都市だけの運動としてはありえない。無農薬野菜の問題にしろ、安定価格の問題にしろ、契約生産・契約販売の問題にしろ、都市と農村、消費者と農民が同じ利害の上に立つことを前提としてはじめて成立することである。それゆゑ生産者としてのわれわれの、都市に対する働きかけは、直販活動を通じてへ都市―農村連合へ或いはへ消費者―農民連合への産姿役を務めることである。

その三 自前の流通機構

本来流通とは、生産者と消費者の間のある種の信頼関係がキズナとなって需給関係が成立し、物が流れることを意味するものである。しかし今日あるそれは、資本の増殖のためのものであり、物が人間を支配し、生産者と消費者の関係を敵対関係に陥しめるものでしかない。

米の食糧管理制度の廃止の方向に見られるように、主食である米から生野菜にいたるまで、大手商社・大手スーパーによる流通機構の寡占体制は、生産者・消費者を等しく収奪している。われわれはこのような寡占体制に対して、まず横谷部落二四世帯とともに、生産者と消費者の強い連体と信頼関係を基調とした自前の流通体制を創出することによって、資本が自由に操縦している価格による支配を断とうとするものである。そこにこそ都市と農村を結ぶ視えないコミュニケーションの糸が現れてくる契機があると考ええる。

その四 コミュニオン学校

最後になったが、これはわれわれ自身の問題である。われわれは圧倒的に少数であり、圧倒的に未熟である。そしてあらゆる行為は常にその主体が問い返されている。われわれは外的表現としての種々の運動の内的根拠として、われわれの内なるコミュニケーション像を豊饒化せねばならない。

人間の自由・平等・充足等が主観でしかはかりえないとしたら、それぞれの人間のものさしがどうであるかということが何よりも問題にされる。しかし、人間はこの主観的なものを外化された人行為としてしか追求しえないという本質的な悲劇性を背負わされている。そこでわれわれに何ができるか。

コミュニケーション学校は、知識のみを与える場ではないし、技術の習得のみを目的とした場でもない。人間と人間との出会い、個人と集団のありよう、そして何よりも自らを新しい人間として鍛え提出する場である。

コミュニケーション学校はそれだけで独立しえるものではない。われわれにとつてのコミュニケーションは、動きの中でこそ姿を現わすものであり、コミュニケーション学校の作業もまた闘いの一環としてある。

× × × ×

四つの闘争方針をふまえ、昨年一年間の活動の総括と七四年の活動計画を話し合うスタディキャンプが今年の一月二日～六日、出稼ぎコミュニケーションとして共同生活しているなかで行われた。農業生産・直販活動・キャンプ活動・百人委員会などのテーマで具体的に計画を練っていくなかで、広島への直販センターの設置や、

彌栄村の別の部落に「第二共同体」の建設、出稼ぎ廃止のためのつけもの工場などが決定した。（詳しくは「正月スタディキャンプ報告書」をつくりまします）

雪の彌栄に思いをはせながら、「出稼ぎコミュニケーション」と称し、大阪で出稼ぎ生活をしているわれわれは、春、雪どけとともに彌栄村に戻っていく。三月一〇日からの春のワーク・キャンプが、三年目の彌栄之郷共同体の活動の幕あけである。

彌栄之郷共同体・ミニガイド

なまえ 彌栄之郷（やさかのさと） 共同体

ところ 島根県那賀郡彌栄村大字三里は一三八

あし 山陰線浜田駅下車（あるいは広島から

ら広電バス・国鉄バスで浜田へ）、浜田から

石見（いわみ）交通バス、安城）行の終

点で下車。有線電話一二の九（バス停近くの

雑貨屋で借りる）を呼び出せば、迎えに行く。

ひろさ 山林一ヘクタール、畑地五反、水田

一ヘクタール（畑に転用）、水田一反五。

めんばあ 一人（男六、女五）＋イヌ一匹

＋にわとり一五〇羽。

春のキャンプ 一期 三月二〇日～三月五日

二期 三月六日～四月二〇日

詳細は左記まで

大阪府東成区玉津二丁目玉津郵便局留

コミュニケーション百人委員会

（以下略）

（以下略）

（以下略）

（以下略）

（以下略）

紹介

外国のアナキスト・グループ I

フランスのアナキストたち

五つの潮流その対立と抗争

江 口 幹

(「わがドン・キホーテたち」より)

本稿は『文芸展望』四号(一九七四年四月・筑摩書房刊)に掲載された、江口幹氏の小説「わがドン・キホーテたち」より、現代フランスのアナキスト・グループに触れられた部分を、著者の了解を得て収録したものである。著者の見聞と体験にもとづいて書かれた本稿は、フランスのアナキズム運動の現状を把握する好個の報告といえる。

(編集部)

フランスにおけるアナキズム運動は、十九世紀の半ばに成立する。日本というなら、幕末の安政期に当る。それ以後半世紀は、何人かの思想家と彼らをめぐるグループの時代である。大衆運動、特に第一インターナショナルとサンジカリズム運動に大きな影響力を持つが、全国的な統一組織はまだ姿を見せていない。その種の組織が現われるのは、かなり遅れてであって、無政府共産主義者同盟(AAC)、無政府共産主義者連盟(FAC)、革命的アナキスト連盟(FAR)といった組織が継承的に活動するのは一九一〇年代になってであり、二つの大戦による中断を経て、フランス解放後、同種の組織は、四五年十月のバリ大会によるアナキスト連盟(FA)として登場する。この連盟の傍らには、サンジカリストの流れ、個人主義者の流れがあり、FAと連携する姿勢をとっていた。

戦争は社会の左翼化の契機である。一九五〇年代の初めまで、アナキズム運動はかなり活発な動きを見せる。FA最初の分裂は、一九五二年から五三年にかけて行なわれる。フォントニ派の自由

共産主義者たちが、F Aのすべてのポストに選出され、それによって、各種潮流のアナキストの連合体だったF Aが、F C L（自由共産主義者連盟）に転換したからである。その過程で多くのグループが除名された。そして、F C Lは、一九五六年の国民議会選挙にAアナキズムの伝統に背いてV参加し、それがF C L自壊の原因となる。

一方、除名されたAルイズ・ミシェルVグループを中心にして、一九五三年にF A再建大会が開かれ、そこから今日もなお存在するF Aが生まれ、やがてフランスを代表する組織になる。

一九五六年のF C Lの破産後、そこから一グループは、G A A R（革命行動アナキストグループ）を創立する。その理論機関誌が、数々の成果をあげて注目されることとなる。『黒と赤』である。一九六一年になると、G A A Rの多数派はF Aの中でU G A C（無政府共産主義者グループ同盟）派を形成する。残った少数派は、『黒と赤』グループとして存続する。一方、F Aの中には絶えず反対派が存在していた。マルクス主義的な逸脱をしていると非難された人々や、スペイン派と呼ばれる、スペインアナキズムの理論と実践の模範を説いた人々である。

F Aの決定的な分裂は一九六七年に起きた。それは、F Aから離脱した人々によれば、一部のA独裁者Vの掌中にF Aを握ろうとする試みのためであり、F Aの責任者たちによれば、A人騒がせな連中Vの陰謀のためである。結局、多くの反対派がF Aを去り、F Aは、フランスの代表的な組織から、単なる一グループに転落する。

F Aを離脱したグループによる最大の組織はO R A（アナキスト

革命組織）であり、これはかつてF A内にいた若い自由共産主義者たちの組織体である。別の、ほぼ同傾向のグループが、M C L（自由共産主義運動）を形成している。

U G A C派の一部は、反権威主義的なマルクス主義者たちと合流する立場に向かい、T A Cグループを結成する。

六八年五月の起爆剤となった、ナンテールにおける三月二十二日運動の創立メンバーを含む『黒と赤』グループは、あの五月以後『I C O（労働者情報通信）』を発行する、自発主義者ないし工場評議会主義者のグループと協力している。

このほかに、アナキズム運動の外縁にあって組織としてよりもその思想によって注目すべきものに、状況主義者インターナショナル（I S）がある。

まさしく百家争鳴的であるが、この現況をいくらか整理して見直してみると、フランスアナキズム運動の分布は次のようなもの

二

1 各種傾向のアナキストの連合体 I F A
地域的、思想的な各種グループのゆるい連合体で、大別して以下の三つの思想傾向の人々を含んでいる。

個人主義者 I 組織、少なくとも緊密な組織化に反対し、主として個人的な生き方を問題とする人たち。したがって社会変革への姿勢は薄い。

アナルコ・サンジカリスト 労働組合を、社会変革のための運動の組織でもあり、未来社会の基礎でもありとみなし、それ以

外の組織の必要を原則として認めない人たち。もっとも、現在は組合運動内部での実際の足場をほとんど失っているで、その主張は空論となりがちである。

自由共産主義者——自由共産主義社会に到達するための社会変革は、飽くまでも大衆自身の仕事であることを認めるが、同時に革命家集団の役割も不可欠である、と考える人たち。もっとも、FA内のこの傾向の人々は、実際には、かつてそういう立場に立っていた思想家への愛に生きていたといった方がよいかもしれない。現実変革のための明確な綱領も、行動の情熱も持っていない。したがって、一部でいわれるように、絶対自由主義的ユマニストと彼らと呼んだ方が適切ともいえる。革命は社会のゆっくりした進化の果てにくるもので、当面はその進化をいくらかでも促進すればよい、と考えている人たちである。

こうした雑多な構成のため、FAは強力な統一行動はとれず、組織としてやっているのは、新聞の発行、講演会など集会の開催にすぎない。実態からいえば、FAは、社会変革のための組織というよりは、アナキズム愛好家集団といった観がある。

2 自由共産主義者の二つの組織——ORAとMCL

革命は大衆自身の事業であるにもかかわらず、革命には革命家独自の仕事があると考え、一種の前衛組織の必要を認める人たちからなる、この二つの組織は、FA内の自由共産主義者たちに比べればずっと若い世代からなり、現実変革の情熱もあり、行動力もある。ORAとMCLの間には、しばしば統一問題が起きているように、主張にそう大きなへだたりはないといっている。ただ人脈の違いがあるのと、強いていえば、ORAがアナキズムの伝統に対して比較的古典的な立場をとっているのに対し、MCLはより柔軟である。たとえば、ORAにはマルクス主義に対してただちに感情的に反撥する姿勢があるが、MCLには、マルクス主義の中にも絶対自由主義的な流れのあることを認めようとする感

覚がある。

3 マルクス主義者と提携するグループ——TAC
TACは、行動のための組織というよりは、理論研究グループで『トリビュヌ・アナリスト・コミュニスト(TAC)』誌を発行している。革命がアナキストのみによって行なわれうと考えるのは現実的でない、という立場から、マルクス主義者の中の絶対自由主義的な潮流、具体的にはフランス共産党を脱党した、ウィジェ、ガローディなどの一派と提携している。

ポール・ドゥネー——TACグループの主宰者。彼がUGACの精神を最も正統的に受けついでいると聞き、また彼らの機関誌を散見してみて、私はいつか彼への好意を育てていた。

UGAC(無政府共産主義者グループ同盟)というのは、FAの中に存在していた新鮮な感覚を持つ分派で、このグループがフランスのみならず世界のアナキズム運動者の中で著名となった、一九六六年秋に、『世界の同志への手紙——何をなすべきか』という長文のパンフレット(日本文にして四百字詰百五十枚を公表し、国際的な討議を求めたからである)。

4 前衛組織を否定する自発主義者——ICOその他

大衆の自発的エネルギーを抑圧するか限定し、真の解放を妨げるものとして前衛組織を否定する人たち。独立的な小グループ、コミュニティ運動グループ、全く組織を持たない人々などに別れるが、代表的なものにICOグループがある。これは、政党や伝統的な組合にもはや信頼をおかなくなった労働者たちを結集しようとするグループで、評議会主義者とも分類されているが、指導のためではなく労働者自身の闘争の経験交流のために、雑誌『労働者情報通信(ICO)』を発行している。

5 文化的思想的グループとしてユニークなもの——状況主義者インターナショナル(IS)

フランスのみではなく、イタリア、北欧、アメリカにも組織を

持つが、組織としては全くの少数者集団。しかし、理論的な水準は高く、独自の現代社会分析にもとづく思想的影響力は大きい。

以上、大別して五つの潮流の対立と抗争。それぞれの分派の間では、協力連携の立場をとっているものもないではないが、どちらかといえば、反撥し相争う姿勢の方が強い。そこに嘆くべき現実を指摘することは容易だけれども、本来、少なくとも限定した目標については結集しうる勢力がなぜ四分五裂しているのか、その理由を確認してみることが、単に嘆いてみるよりも重要だ、と私は感ずる。というのも、そんな風に分裂しているのは十分に理由のあることだし、理由を明らかにすることは、問題解決の第一歩だ、と思われるからである。私の考えでは、分裂の大きな要因は四つあげることができる。

三

1 分裂の要因の第一は、社会変革に対する姿勢の相違に由来する。それは、図式的にいえば、改良か革命かの相違、ともいえるもので、革命を遠い将来のものと想定するか、ただちに実現させようとするか、の姿勢の違いである。

一方では理想社会への到達がただちに可能だと考えるのは現実的でない、したがって現在の社会の中でアナキズムの細片を探しだし、現行の秩序の中でそれを発展させることこそ妥当だ、と考える人々がいる。これらの人々の行動は穏健であり、合法的であり、実際の階級闘争の場を離れて、思想伝道といった範囲にとどまりがちである。

一方には、できる限り速やかに社会変革を達成しようとし、そ

のために現実のあらゆる矛盾を激発させ、実際の階級闘争の場で最大限の影響力を行使しようとする人々がいる。これらの人々の行動は過激であり、非合法化しがちであり、時には小児的な英雄主義に堕しかねない。

一方は他方を、性急だ、と非難し、一方は他方を、革命を放棄したものと、罵倒する。

2 分裂の要因の第二は、アナキズムの理論的な薄弱さにもとづくものである。ここで薄弱さ、というのは、現にわれわれが生きている社会をどう解釈し、それをいかに変革し、どのような社会に到達せしめようとするのか、明確な主張を欠いている、という意味である。その不明確さを、アナキズムという思想そのものの本質に帰する見方もあるが、私はむしろ、現代のアナキストの資質の低さによる、と考える。

アナキズムの有力な思想家は十九世紀にでた。意識的な思想としてのアナキズムは、十九世紀に形成された、といっていい。しかし、二十世紀には通用しない、今日になってみれば薄弱なのだ、と即座にはいいきれない。十九世紀のアナキズム思想家たち、たとえばブルードン、バクーニン、クロボトキンの書物を読むと、私は今でも感動する。感動するだけでなく、そこに時代を超えて普遍的なもの、十分今日的で豊かなものを読みとる。かえって、今日であればこそ逆にその思想が鮮かさを増す、という部分すらある。古臭い、と簡単にはいいきれない。しかし同時に、彼らの主張をそのまま今日に通用させるのは、無理だ、という面があるとも感ずる。どのような思想も、所詮は時代を離れられない、という制約がある。思想は、ある状況のある資質への投影にすぎな

い。社会状況の変化とともに、時代の認識水準の変化とともに、次第に陳腐化してゆく面があることは、どのように偉大な思想家にとっても否定しえないことである。しかも、二十世紀に入ってからの変化はまことに急激だった。そこに、前代の思想を、教義化することの危険ないしは滑稽さがある。ところが、その危険ないし滑稽さに陥っているのが、ロシア革命およびスペイン革命におけるアナキストの決定的な敗北以後、アナキズムを細々と守ってきた人々であり、私はそこにそれらの人々の資質の低さを見るのである。ある思想が学ぶべきものである時、重視すべきはその結論ではない。結論は、要するに状況の所産にすぎず、変りうるものだからである。学ばねばならないのは、むしろ語られたものではなく、そんな風に語らしめた姿勢である。アナキズム思想家たちについていうなら、彼らの主張は、それはそれで重要であるが、もっと重要なのは、それらの主張を生み出したもの、彼らの体内に脈々と流れていたもの、人間への限りない愛、人間を抑圧するものへの激しい怒り、社会的不正への憤りないし痛み、より完全な社会を実現せしめようとする飽くなき情熱、現実との中でつねに思想を新たなものとしていった柔軟な眼、である。

彼らを継承した人々、私が資質の低いと呼んだ人々に欠けているか十分でないのが、前代の思想家たちを内的につき動かしていたものである。二代目、三代目は、初代の姿勢を受け継がず、その語ったものを教義化し、そうすることで形骸化し、現実に対する効力を失わせ、仲間うちだけの特殊語とした。そういう意味で、きわめて保守的な人々、フランスでいえばF A周辺にいるような人々の間で、アナキズムは温存されてきたのである。

しかし、そうした保守的な流れとは別に、現実に対して有効なものとしてのアナキズムを形成しようとする潮流が登場するのもまた当然のことだろう。新しいアナキズムの名の下に、その試みはいくたびも繰返され、たとえばF C Lの国民議会議選挙への参加といったアナキズムのA聖なるV伝統への挑戦もしばしば行なわれるが、そうした今日の模索する分派と、伝統に保守的な分派の存在は、分裂の要因として絶えず見られたものだった。この要因は、現実の要請に十分応えうるアナキズムがまだ形成されていないために、依然として消滅していない。

3 分裂の要因の第三は、アナキストの社会的孤立にある。ロシア革命以後、アナキストたちは一種の閉鎖した世界に追い込まれて社会的に孤立し、それが思想の形骸化を促進し、その形骸化がまた社会的な孤立化を深めた。アナキストたちは、社会に対して効果的に働きかける力のない、社会に向かって共通の言語で語りかけることもない集団に転落する。現実との対決を通じて不断に思想を新たにしてくる姿勢は失われた。現実に対して有効な思想も手段もない。外部に対しては、いわば暖簾に腕押しといった無力な状態におかれる。そういう状態の下では、何か手ごたえのあることをしようとするれば、それは内部にしかない。鬱積したエネルギーが内部に捌け口を求める。そこで、些細な取るに足らない原因をめぐって、誇大な自己偽瞞的な名分の下に抗争が行なわれることとなるのだった。

4 分裂の要因の第四は、アナキストたちが、その主張にもかかわらず、連合という組織形態を権威主義的な組織に代る機能的なものとして育てていない、という事情にある。

アナキストたちが組織を否定するというのは、誤解でなければ悪意ある中傷である。個人がいかなる組織からも切り離されて孤立して生存しなければならぬとすれば、そこには密林に放置された、悲惨な野獣の生活しかない。アナキズムの根底には、人間の自由は集団的営為によって初めて保証される、いいかえれば、自分をとりまく多くの人々の努力によって補われてのみ、人間は人間らしい存在でありうる、という理解がある。ここにみられるのは、社会的な関係、つまり、個人の連帯——組織の必要の重視であって、組織を否定する志向ではない。

しかし反面、アナキストたちがある種の組織に敵意を抱いたこともまた確かなことだった。それは、ある特定の人々の支配を保証し、大多数の人々に従属を強いるものとして、組織が機能している場合である。そして、その種の、個人の自由を圧殺する組織の形に対し、個人の自由な発意と合意とを保証する組織形態として、アナキストたちが揭示したものが、連合、だった。

それは、集団的にしか問題を解決できないので、何らかの必要に応じて個人が提携した、という性格の組織である。そこでは、いうまでもなく参加者すべての権利は平等であり、各個人の行動について決定権を持つものは、各個人ひとりひとりだった。自由な個人の、ある目的のための提携、それが連合である。しかし、この組織形態が参加者の自由を抑圧しないという保証は、一体どこにあるのか。

個人たちが提携する際の、契約の仕方にある、というのが、この問題について最も深く考えた人だと私には思われる、ブルードンの意見である。彼は、ある組織が、限定された一ないし多数の

目的のための、参加当事者が相互に平等に義務を負う性格の、内容を具体的に明示した契約の上に成立し、参加者が、その契約によって合意した義務以外について、完全な自由を留保するならば、その組織が参加者の自由を侵害することはない、と考えている。私はこのブルードンの思想に異論はないし、そこにアナキズムを現実化する、重要な理念の一つを見る。

ところが、奇妙なことに、このブルードンの思想はアナキズム運動史の途中のどこかで消え失せている。現にアナキストたちが組織運営に際して行なっているものは、ブルードンの思想とはおよそ正反対のものであって、そのことによって、自由である筈のアナキストの組織の中に、ボスが発生しやすいという滑稽な構造が生まれ、それが分裂抗争を促す一因となっているのだった。

ブルードンによれば、個人の自由を保証するものは、できるだけ明確なルールの設定とその尊重である。ルールとは、組織についていうなら規約である。ところが、現実のアナキスト組織においては、規約アレギーとでもいうべきものが存在する。規約を設定することは、参加者の自由を束縛するものだ、という感覚がある。組織の運営は、できるだけ曖昧に、誰に決定権があるのか、誰が責任を負うのか、わからない形で、何となく進めるのが、参加者の自由を保証する道だ、といった感覚がある。それは実は、機能的な、しかも個人の自由を侵害しない、責任ある組織運営はどのようなにして可能か、という問題の回避でしかないが、そんな風に明確なルールなしに組織が運営されれば、実際に運営の衝に当たることを買ってでたもの、力あるもの、厚かましいもの、無神経なものに過度の自由裁量権が集中し、ボス化する、というこ

とが必ず起きる。そして、アナキストグループには、事実、多かれ少なかれボスないし小ボスが存在するし、時には独裁者すら存在する。そこから分裂の一因が生じているのだった。

さて、大きく別けて私には四つあると思われた分裂の要因をあげてみたが、六七年のF Aの分裂もまた、それらの要因のいずれにもかかわりがある。特にF Aが、革命を遠い将来のことと見る人々と、即座に何ものかを達成しようとする人々を混在させていたことが、F Aから離脱した人々には耐えがたいことのようにだった。しかし、それよりも分裂の直接の契機は、モリス・ジュアユーというボスの存在、その独裁者的な言行にあった、と私は聞いている。中でも若い世代は彼に反撥し、大挙してF Aから離脱することになったのだった。

このモリスは、F Aの中心的なグループ、Aルイズ・ミシエルVグループの指導者で、五十年配だろうか、小男だが、大時代な抑揚で、体を一杯に使った大袈裟なジェスチュアを交えて、いつ果てるともない演説をする、労働者出身の怒号型の雄弁家、あるいは煽動家である。

本本文

× × ×

本文は、初めに記したように『文芸展望』四号掲載の江口幹「わがドン・キホーテたち」より、フランスのアナキストグループの現状に関連した部分を抜粋したものである。なお紙面の都合上、情況主義者グループ、『労働者情報通信』グループの補足の部分を割愛した。この部分については機会をみて掲載したいと考えて

いるが、近々（四月予定『黒いパリ』の書名で筑摩書房より単行本として刊行されるので、合わせて読んで欲しいと思う。

リベール 三号 △予告▽

―特集・朝鮮人のアナキズム運動―

朝鮮人アナキスト運動の過去及び現在

宋 世向

金宗鎮伝 或る朝鮮人アナキストの生涯

李 乙

一在日朝鮮人アナキストの回想

宋 世向

韓国レポート

尾関 弘

現在の韓国アナキズム運動

予定

その他

月刊・リベール

定期購読者：募集中ノ

購読料 年間六〇〇円（申し込みは左記まで）

リベール社 京都市左京区田中門前町二八の五

―長編小説― 筑摩書房

『方位を求めて』 江口 幹 九五〇円

『黒いパリ』 江口 幹 四月刊行予定

筑摩書房